

【徒然草】

【】(神無月のころ)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

神無月のころ、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入ることはべりしに、はるかなる苔の細道を踏み分けて、心細く住みなしたるいほりあり。木の葉につづもるるかけひのしづくならでは、つゆおとなふものなし。閻伽柵に「」など折り散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。

かくてもあられるよ、とあはれに見るほどに、かなたの庭に、大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるがまはりをきびしく囲ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかば、と覚えしか。

(徒然草)

問一 「」に入る言葉として最も適当なものを次の中から選べ。

ア 松・山吹 イ 桜・竹 ウ 桃・南天 エ 梅・柳 オ 菊・紅葉

問二 回りをきびしく囲った柑子の木を見て、作者は主人(住む人)に対してどんな気持ちを持ったのか、二十五字程度で書け。

問三 「徒然草」を含む四つの作品が、古い順に上から正しく並べられているものを次の中から選べ。

ア 「万葉集」 ・ 「枕草子」 ・ 「徒然草」 ・ 「おくのほそ道」

イ 「万葉集」 ・ 「おくのほそ道」 ・ 「枕草子」 ・ 「徒然草」

ウ 「万葉集」 ・ 「徒然草」 ・ 「おくのほそ道」 ・ 「枕草子」

エ 「万葉集」 ・ 「枕草子」 ・ 「おくのほそ道」 ・ 「徒然草」

オ 「万葉集」 ・ 「徒然草」 ・ 「枕草子」 ・ 「おくのほそ道」

(福島県)

「解答」

問一 オ

問二 柑子の実をとられまいとする狭い心に失望する気持ち

問三 ア